

<望みに満ちた人生> マタイの福音書7章24-29節

神の言葉の前に立って問い続ける時、私たちは気づかされるのではないのでしょうか。私たちが問うというよりも、むしろ私たちが問われているんじゃないのかと。イエス・キリストの言葉に問われる。このわたしのことばをあなたはどうか聞くのか、どう心に受け入れるのか、それとも受け入れようとしないのかと、神に問われるのです。

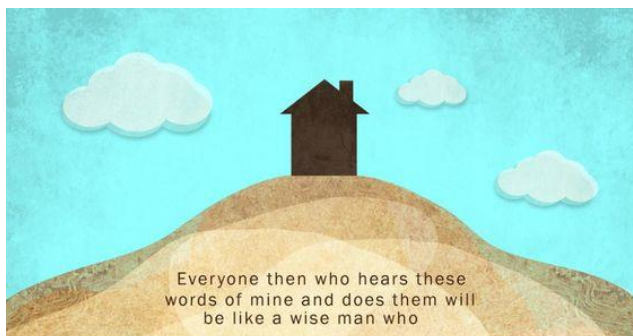
『イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆たちはその教えに驚いたのです。というのは、イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。』イエス様のことばを聞いて人々は驚いた。

① 「このお方の権威はいったい何だろう！」② 「律法学者たちのようではなく」
律法主義：『彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。』（マタイ 23:4・2017年訳）
＝けれども律法学者とは違う権威がイエス様にはあったと人々は感じ取った。だからこそ人々は驚いた。人々の心を打つものがあった。

『だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。』
これはイエス様の願いが込められた言葉です。あなたがたに倒れてほしくないのだ。

Q：賢い人と愚かな人。このふたりの賢さ、愚かさは何によって計られるのか？

問題は行いがあるかないかではない。問題はその行いがだれの言葉を聞いてしていることなのか、誰の言葉に従ってその行いをしているのか、29節の言葉で言うならば、誰の権威に従って自分の行ないを定めているのかということ。



【あなたはいったい、誰の言葉を信じて生きているのか。】
そういう問いかけがここにはある。

詩『子は親の鏡』ドロシー・ロー・ノルト（家庭教育の子育ての教育家）

けなされて育つと、子どもは人をけなすようになる
とげとげした家庭で育つと、子どもは乱暴になる
不安な気持ちで育てると、子どもが不安になる
「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもはみじめな気持ちになる
子どもをバカにすると、引っ込み思案（じあん）な子になる
親が他人を羨（うらや）んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる
叱りつけてばかりいると、子どもは、「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
親が正直であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
やさしく、思いやりを持って育てれば、子どもは、やさしい子に育つ
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ
和気あいあいとした家庭で育てば、
子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

私たちが抱える問題のひとつは、これは自分のため、これも自分のためと思いながらしている私たちの行動が、本当には私たちを生かすものには、なっていないことがあるということ。だからこそ、私をほんとうに愛してくださるお方の言葉が必要。私のことを本当に思っていてくださるお方のことばを聞かなければいけないのです。

主イエス・キリストは私たちの負いきれない罪による重荷を背負い、私たちの身代わりとなって十字架で死なれた。そして神は私たちの罪の赦しを確かなものとするためにこのイエス・キリストを死から復活させた。ここに神の愛がはっきりと表されている。